三毛乱治郎短編 Mon.10.13.2014

誰かが見ている

昔、こんな話があった。

ある日、ある小学校で、先生がひとつのテーマを生徒に与えた。クラスのみんなが自由に討論して、「何が正しいか」を考えるのである。そのとき、いつも静かな読書家のH君がポツリと、しかし堂々と云った意見に、日ごろから活発な一団の生徒が猛反発した。「H君の言っていることはおかしいよ」「そうだよ、それは違うよ」「絶対おかしいよ！」彼らの意見は、殆どいつも正しかったので、特に自分の意見を持たない他の生徒は何も言わずにその様子を眺めながら、今度もやはり活発なクラスメートの一団のほうが正しいのだろうと何となく納得している様子であった。クラスの中は静まり返ったままである。そして数秒が経過して、気まずい沈黙を救うかのようにチャイムが鳴った。その授業は当日の最終時間だったので、結論は持ち越され、先生も生徒もそのまま無言で教室をあとにした。H君はいつものように友達と談笑することもなく、しょげ返って独りトボトボと歩いて行った。

家へ帰ると、お母さんがH君の元気がないことに気付いた。「どうしたの？」「何か心配なことでもあるの？」と聞かれたので、彼はその日学校であった出来事を話した。話を聞き終えたお母さんは「ふ～ん」と頷いただけで、どちらが正しいとは言わない。H君の話だけでは、相手がどんな根拠で「おかしい」と言ったのかが見えてこなかったからだ。「その場の状況はよく分からないけれど、Hは自分の意見が正しいと思ったのでしょう？」H君ははっきりと頷いた。「だったら、それでいいじゃない。もし誰も解ってくれなくても、正しければ神様だけはちゃんと見ていてくれるから」と云って、昔の話をしてくれた。親から子へ、子から孫へと語り継がれたよもやま話である。都会暮らしのH君の先祖が、どこで仕入れた話かは知らない。けれど本の中の話ではなく、現実の話のようだ。「昔ね、農家の人は、今みたいに機械がなくてとても大変だったんだって。そのときどんなに苦しくてもお天道さまだけは自分のやっていることを見ていてくれると思って頑張れたんだって」「お天道さまってなあに？」「太陽のことで、昔の人は太陽が神様だと思っていたらしいの」昔の人はそうやって自然を敬いながら、自分の行いを正しい方向へ導いてきたのだそうだ。そうやって正しく生きている自分に誇りを持って自らを励ましたそうだ。だからH君もよく考えた上で自分が正しいと思ったことは無理に間違いだと思う方向へ曲げる必要はない。真実はやがて太陽に照らされるから。そう話した後でお母さんはこう云った。「大丈夫。きっと明日になればよくなっていると思うよ。だからきょうはもう気にせずに休みなさい」そう言われて、その夜H君は安心して眠りに就いた。

翌日、学校へ行くと、きのうH君の意見に反対した一団がまっさきに近づいて来て、まず一人が言った。「きのうはごめんね」その一言にH君がぽかんとしていると、みんな次々に口を開いた。「きのうね、家へ帰ってお母さんに話したら、H君の言うことが正しいってお母さんに言われちゃった」「うちのお父さんもそう言っていた」「うちの家族もみんなそう言ったよ」「それでね、よく考えたら、私もH君の言うことが正しいと思えたの」「僕もそう思った」「ごめんね」「ごめんね」みんな笑顔である。H君の心の中のモヤはどこかに吹き飛んでしまった。彼らはすっきりと仲直りをした。そしてその後も以前と変わることなく仲良く過ごした。

やがてH君は大人になり、社会に出た。そして事あるごとに、小学生の頃にお母さんから聞いた話と、あの時の出来事を思い出す。それは親子兄弟、友達、近隣にコミュニケーションが存在した時代の話である。けれどH君はコミュニケーション不足になった現代でも、正しく生きようとする人間の心はなくなっているとは思わない。ただ直接のつながりが希薄になったから、あまり目に見えないだけだ。真実や、人間の持っている美しさは時代を経ても変わらないとH君は思う。そして苦しい時、神様か、太陽か、あるいは同じ人間の誰かが、必ずどこかで正しい行いを見ていてくれると心に留めて生きている。「真面目」だと損だという人もいる。けれどH君はそうは思わない。それどころかきっとそういう人には幸福が与えられるだろうとさえ思う。その幸福とは人間としての精神的満足だ。それは物質よりも名誉よりも得難い褒美で、最高に心を明るく照らしてくれるものではないかと思う。H君が子供の頃お母さんから聞いた話は、いつかどこかで誰かに役立つかもしれない。

ある日、こんなことがあった。H君に意地悪をした人が、そのすぐあとで何の障害物もない平坦な道でいきなり転んだ。本人も「あれ？あれ？」と不思議がった。大分後ろを歩いていたH君も驚いた。正義は日常のこんな小さなことにさえ作用するものかと思えた出来事であった。